

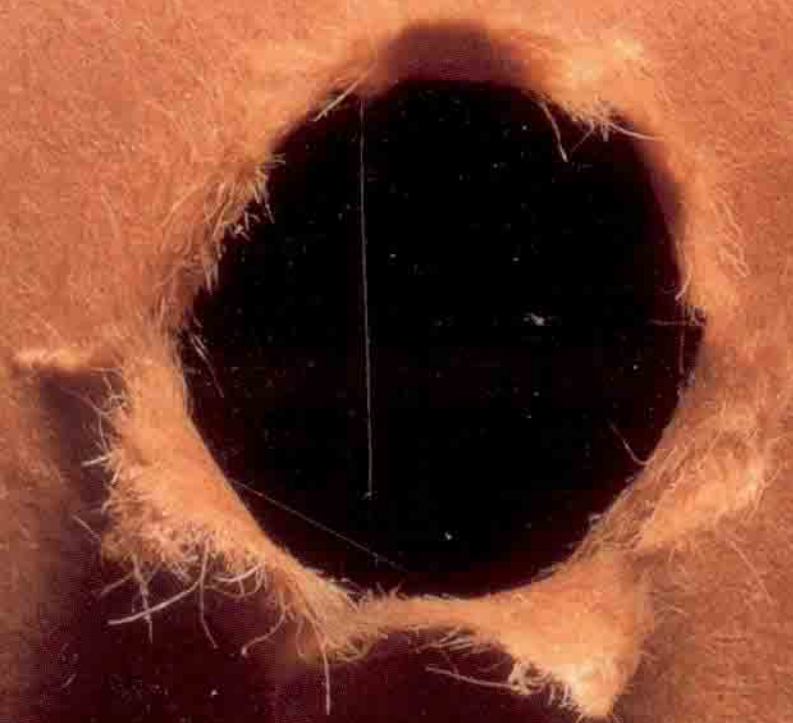
●長編サスペンス小説

Ota Ranzō

太田蘭三

破牢の人

はろうのひと



KOBUNSHA BUNKO
光文社文庫



光文社文庫

長編サスペンス小説

は ろう ひと
破 牢 の 人

著 者 おお た らん ぞう
太 田 蘭 三

2001年1月20日 初版1刷発行

2001年5月10日 3刷発行

発行者 濱 井 武
印 刷 堀 内 印 刷
製 本 明 泉 堂 製 本

発行所 株式会社 光 文 社

〒112-8011 東京都文京区音羽1-16-6

電話 (03)5395-8149 編集部

8113 販売部

8125 業務部

振替 00160-3-115347

© Ranzō Ōta 2001

落丁本・乱丁本は業務部にご連絡くだされば、お取替えいたします。

ISBN4-334-73103-1 Printed in Japan

〔R〕本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター(03-3401-2382)にご連絡ください。

光文社文庫

長編サスペンス小説

破牢の人

おお た らん ぞう
太田蘭三



光 文 社

目次

地獄船	7	鉄格子の中から	159
経歴	20	脱獄	177
犯罪のプロセス	32	土中の死体	204
凶刃	59	みなみはつこうださん 南八甲田山	219
虚偽の自白	86	二人目の容疑者	246
愛と拷問 ごうもん	97	網走刑務所 あばしり	254
誤審裁判	129	大雪山 だいせつざん の山肌	274
第二の強殺事件	142	めぐり逢い	303
		文庫版あとがき	321

破牢の人

地獄船

1

カムチャツカ海域は、見渡すかぎり重い鉛色の海面におおわれ、ところどころに白い波頭を碎かせながら、もりあがり、大きくうねっていた。一昨日までは、千島列島のシンシル岳の稜線が、はるか彼方に青くぼんやりと望まれていたが、いまは視界がせばまり、頭上に低く灰色の雲がたれ下がって、水平線はボウーと海霧でけむっていた。

七月の半ばというのに、漁夫や雑夫たちの潮に濡れた重い半天をとおして、寒気が汗まみれの肌に刺しこんでくる。

蟹工船の菊丸は、船腹に赤錆の鉄板をのぞかせた古びた五千トンの巨体を大きなうねりにゆさぶられて、ときどき、ギイ、ギイーと心細げにきしませた。汽笛が、ヒュー、ヒューと悲鳴をあげる。

船首の上甲板には、網からはずされたばかりの山積みのタラバガニが身もがきし、這い出そうとして、爪でゴソゴソと床を鳴らしている。漁夫や雑夫たちの手で、その蟹の山が崩されて、つぎつぎに絶え間なく洗滌タンクへ投げこまれていく。

中央から船尾にかけての中甲板には、四台のウインチが据えられている。そのまわりに大きな茹で釜や截割りテーブルがいくつもならんでいた。

甲羅をはずされた蟹は、この茹で釜で茹であげられて、截割りテーブルに運ばれ、脚の付け根の肩肉、一番脚、二番脚、三番脚、そしてハサミ、爪と、つぎつぎに出刃庖丁で切断されたあと、中身の肉が取り出されて、原料運搬口から下甲板の工場に下ろされ、ここで計量器にかけられて、缶に詰められていく。雑夫たちは、この一番脚を「棒肉」、二番脚を「ラッキョ」、三番脚を「ナンバン」と呼んでいた。

この蟹工船、正確にいうと、蟹母船だが、この菊丸には、船員、漁夫、雑夫ら三百人あまりが乗りこんで、こうした操業をつづけていた。海に浮かんだ巨大な工場である。

日本の蟹漁業は、このカムチャツカ海域やオホーツク海域で操業されてきたが、漁場がしだいに北進するにつれて、陸地の工場との距離が遠くなっていき、獲った蟹を運ぶのに時間がかかるし、鮮度もわるくなつて、製品の質が低下するので、船の中で缶詰にすることが考えられるようになった。

大正三年（一九一四）に水産講習所の雲鷹丸が、はじめて、これを試みたが、確実な成績を

得られなかった。この後、大正九年（一九二〇）、富山県水産講習所の呉羽丸が三百箱製造して成功をおさめた。これが蟹母船の促進の原因となり、大正末期の発展期となると、乗員数は一隻、三、四百人とふくれあがり、この漁業の総従業員数は七千四百人に達したのだった。

——大正十二年（一九二三）のことである。

獅子原由造も、この蟹母船、菊丸に雑夫として乗りこんでいた。十六歳であつた。

第一次世界大戦のおわつたあとの恐慌のころである。株式相場は暴落したし、綿糸や生糸などの商品も、いつせいに暴落した。当然、マユの値も下がり、農産物価も下がって、農村に大打撃を与えた。この恐慌の被害は、小作農民を押しつぶした。

そこで、東北地方の小作農民や北海道の農民たちは、この蟹工船の労働が、ひどく苛酷なものとなつていても、手取り早く、いくらかでもよけいに稼ごうとして、漁夫や雑夫として乗りこんだものだった。それゆえ、百姓の漁夫が多かつた。

かれらの中には、十五、六の少年もまじつていた。農家の口べらしと、やはり稼ぎのためであつた。雑夫を募集する周旋屋の手をとおして送りこまれてきたのである。

獅子原由造も、そんなひとりだった。

背丈は高くないが、肩幅があつて、胸板も厚く、がっしりとした体軀である。ヨレヨレの黒いズボンの上に太股まであるゴム長を履いて、シャツの上に濃紺の半天を着ていた。シャツも

半天も蟹の汁でよごれて、ひどくべとついていたし、じつとりと潮で濡れていた。坊主頭に手拭で頬かむりをしている。わずかに顎の張った丸顔だった。赤く染まった頬っぺただけが、まだ少年らしい面差しをのぞかせている。

獅子原は、中甲板の截割りテーブルに向かい、出刃庖丁を持って、甲羅をはずされ茹であげられた蟹の脚を休みなく切りつづけていた。船のゆれにつれて、無意識にいつも体のバランスをとっている。けれども、両足はもう棒のようになっていたし、肩も堅く張っていた。

こうした労働が、一日二十時間、まる五日つづいているのである。タクアン漬けに菜っ葉汁、そして麦飯の食事をとると、寝る時間は、わずか三時間たらずであった。しかも、寝床は網置場の下の船尾の穴倉だった。陽も射さないし、風も通らない。漬け物樽の積みあげられた物置のすぐ隣だったから、饅えた臭いと男たちの体臭がこもって、いつも空気は濁っていた。おまけに南京虫やノミの巢になっっている。ここにもぐりこんで寝るのである。そしてこの寝床の上には、いくつもの空缶が長い紐で吊されていた。監督が、この紐を引くと、ガランガランと鳴る。雑夫たちは、これを「スズメ追い」と呼んでいた。このスズメ追いが鳴っても、まだ起き出さないと、監督や雑夫長が、鮭殺しの棍棒で叩いて起こすのだ。

しかし、一日に三時間たらずの睡眠がとれるのは、まだいいほうで、徹夜で、三十時間立つたままの重労働がつづくこともある。こんなとき、立ったまま居眠りをするると、「この野郎、寝るんじゃないやねえ、カニは待っちゃくれないんだ。起きろ、目の玉ひんむいて、働

けっ！」

と、監督の怒声がとんできて、また鯨殺しの棍棒で殴りつけられる。

こうして労働時間は長いし、食事はたいがいタクアンに味噌汁、麦飯だけだし、おまけに睡眠時間が短いから、漁夫や雑夫たちの体は、ガタガタになってしまふ。ひどく衰弱しているから、風邪をこじらせただけで、死んでしまうことが間々あった。

青森からやって来たという中年の雑夫が、二日寝こんただけで、穴倉の寢床の中で死亡したのは、ちょうど十日前であつた。ウロコのような垢をこびりつかせた胸は、もう洗濯板のようになっていた。この雑夫は、獅子原ら仲間たちに線香を上げてもらっただけで、死体はすぐに麻袋に詰められて、中甲板から波に沈められたのだつた。水葬である。だが、このとき仲間のひとりが、涙声でしみじみ言つたものだ。

「カムチャツカの海は冷たかろう、これじゃ、ほんとに浮かばれない」

このおりには、獅子原も、はじめて目をうるませた。おなじ少年雑夫のひとりとは、
「おら、ウチで死にてえ。こんな海の上で死にたくねえ」

泣きじゃくりながら、こう声をもらした。

「ここは監獄よりわるい。おまけにまわりは海だから逃げようがない」

頭の禿げあがつた五十がらみの雑夫は、鉛色の波間に沈み行く麻袋を見送つたあと、首をまわして獅子原に言つた。

獅子原由造は、つらいことに慣れていた。子どものころから、体だけは頑丈にできている。だから、他の少年雑夫のように音をあげなかったし、愚痴一つこぼさなかった。監督の銚殺しの棍棒で叩き起こされても、悲鳴をもらさなかった。それゆえ、だれの目にも、

——凶太いガキ、と映った。

獅子原が、こうした蟹工船に乗りこんだのは、これがはじめてではなかった。去年の操業期にも、この菊丸ではなく、高砂丸という四千五百トンの蟹母船に乗りこんで稼いでいるのである。

甲羅をはずされて、茹で釜で茹であげられた蟹の山は、際限なくこの截割りテーブルに運ばれてくる。獅子原は、出刃庖丁を握って、蟹の脚を切りつづけた。肩はコチコチに堅くなっているし、足は棒のようにつつばっている。ゴム長の中の爪先が痺れて、感覚が失せはじめていた。空腹だったし、おまけに眠気がおそってくる。足の力が萎えて、がくつと膝をつきそうになる。それでも、両手は惰性で作業をつづけていた。手拭をとおして頬を刺す冷たい潮風を、もう意識しなくなっていた。

「この野郎！ 寝るんじゃねえ」

ふいに船尾の截割りテーブルのあたりから、監督の怒声が聞こえてきた。つづけて、鯨殺しの棍棒ではげしく殴りつける音がし、「ううーっ」と呻き声があがった。

獅子原は、庖丁を止めて首をまわした。

黒の半天を着た三十がらみの小柄な雑夫が、監督の足もとでころげまわっていた。その背中へ肩へ容赦なく棍棒が叩きつけられる。

「やめろ、やめてくれっ」

棍棒から逃れようとして、悲鳴をあげながら、ころげまわる。

「立てえ、立って働けえ。仕事もろくにしねえで、飯だけ食われてたまるか」

監督が右手で棍棒を振りあげて、仁王立ちになっている。その雑夫は、「ううーっ、ううーっ……」と低く唸りながら、四つん這いになり、それからまたヨロヨロと立ちあがった。

「ここは地獄だ、地獄船だ……」

獅子原とおなじ截割りテーブルのだけれが、吐き出すように言った。

その語尾が風で吹っ切れる。

いつの間にか、いつそううねりが大きくなり、鉛色のどの波頭も白く割れて、三角波が立ち、飛沫が白い煙のように飛びはじめていた。この白い波頭を、漁夫や雑夫たちは、「ウサギが飛ぶ」と言っているが、いくつも大きくもりあがる鉛色の大海原を、まるで白いウサギが無数に飛び交うようであった。

海霧^{ガス}が低く流れはじめて、きゆうに視界がせばまった。時化^{しけ}の近いのが、だれの目にもわかる。

獅子原は顔をあげて、飛び交う白いウサギの群れを見た。

このとき、右隣で作業をしていた雑夫が、テーブルの上に出刃庖丁をとり落とすと、いきなり崩れるようにしやがみこみ、そのまま力なく横ざまに倒れた。

鍋谷^{なべたに}という雑夫であった。仲間うちでは、「ナベさん」と呼ばれていて、獅子原は、この男の名字だけしか知らなかったが、鍋谷正六^{せいりく}、十九歳であった。獅子原より三つ年上だ。細面^{ほそおもて}で華奢^{きゃしゃ}な体つきをしている。

鍋谷は、船のゆれで、いま一度ころがると、四肢^{しし}を投げ出して、濡れた床の上にあおむけになった。

「どうした、ナベさん？」

獅子原は庖丁を置いて、鍋谷のわきに膝をつき、肩を両手でつかんでゆさぶった。おなじテーブルの雑夫たちが駆け寄ってきて、鍋谷の顔をのぞきこみ、

「大丈夫か？」

「しっかりしろよ、しっかり……」

と、口々に声をかけたが、獅子原に肩をゆさぶられて、鍋谷の首がグラグラとゆれるだけだ。無精髭^{ばしやうひげ}を生やした細い顎も首すじも、もう血の気が失せている。目を閉じて、全身を小刻み

にわななかせていた。

鍋谷は、四、五日前から「からだがだるくて、むくんでいるし、息切れがする。休ませてくれ」と雑夫長の沼山ぬまやまに何度も訴えていたのである。

いつも麦飯を食べてはいるものの、塩っぱい菜っ葉の味噌汁にタクアン、たまに付く塩引きの鮭ぐらいでは、どうしても野菜分が不足する。おまけに苛酷な作業と体力の消耗しょうもうがくわわって、脚気かっけになるものが多かった。獅子原にも、鍋谷が脚気にかかったとわかつていた。しかし、沼山雑夫長は、この鍋谷の訴えに耳を貸そうとしなかったし、これを聞いた監督の西塚にしづかは、「仮病を使いやがるとは、けしからん、ゆるせねえ。焼きを入れてやる」こう怒って、きのうの午後、みんなの見ている前で、焼やけ火箸ひばしを鍋谷の背中に押しつけたのだった。で、鍋谷は音をあげ、焼きを入れるのが恐さに無理を重ねて作業をつづけていたのだったが――。

鍋谷は、全身を小刻みにふるわせたまま、もうぐったりと四肢を投げ出して動かなかった。「おい、おまえら、なにしてるんだ？ ……さっさと作業をつづけろ」

怒声をあげながら、沼山雑夫長が鮭殺しの棍棒を持って駆け寄ってきた。西塚監督も棍棒を右手にぶらさげて大股に歩み寄ってくる。

西塚は四十がらみの小肥りの男であった。黒い革のジャンパーの上にゴムのカッパを重ねていた。黒の毛糸の帽子を目深まぶかにかぶって、細い目をけわしく光らせている。鼻の頭が酒焼けで赤かった。漁夫や雑夫たちのあいだでは、「鬼の西塚」と呼ばれている男である。ジャンパー